



熊本弁

安永道義

『くまもと』のアクセントからちがう。東京語でいえば「ま」にある。熊本は「く」が強い。
熊本弁といえは「…ですタイ」といえばすむぐらいに思っ、ここにやってきたのだから始末がわるい。
二月月、三月月。語感、音感に自信(?)の強いわたしは、もう一人前の「熊本弁つかい」と誤信して、さかんに「…タイ」を連発した。

少々知ったふりをするようで悪かったが、「このマークは農林水産物や、こんな加工食品に農林省が付けてもよいと許可した工場が出来た物にしか付いていない印よ」と言ったら、「あらそうですか、私達ももっと勉強せんといかんですな」と言うことであつた。
あらさがしをしているようで恐縮だが、市内に何店かチェーン店を持つある薬店のこと。
私は化粧品を買うため店に入ったが、前後して中年の紳士が続いた。レジの前で店の一切を委かされると思われる美人が愛想よく二人を迎えてくれた。
その紳士の求める商品名がよく聞きとれない様子で「何でしょうか、ひげ剃り後ですか」と問い返した。「いや〇〇」と言葉すくなく品名を言ったが、「ありませんでした」との返事で店を出ようとす客の後姿に大きな舌を出した。
私はケースの中の化粧品を指さし〇〇下さいと顔を上げた途端にいやな顔を見てしまった。彼女は、お客の態度の何に腹をすかかたのか、私が驚きの目でみても平気な様子である。隠しカメラでもあったら悪戯してみたいような態度を目前にし、私がい界からの旅行者であつたら、どんな印象を与えたらうなどと思つた。
小さい事だが思いつくまま書いてみる

これがいけなかつた。同業のH氏が、アタマから冷たい水でもぶっかけるような調子でこういつた。

『東京の人が、熊本弁をつかうのは、ズーゾー弁をつかつて、東北の人をからかう調子、つまり田舎ものをバカにしているみたいでいやな気分だ』
テレビでも「舞台が九州になると、話尾にタイがつくだけで、中味はまるで東京語。H氏でなくても、けつして気分はよくあるまい。」

熊本弁にも標準語があり、ナマリもある。「おろよか」は、いいことの逆。車の練習をしていたころ「右さん、右さん」というから、ミスターミギ氏がいるのかと思うと、ハンドルはおろす。
いやはやまったくたまった次第。
先輩のS氏、銀座のまん中も、熊本弁でカツ歩する。決して標準語や、東京語はつかわぬい。

三代続いた江戸弁や、べらべらの船場コトバを聞くのと同様、S氏の熊本弁はさわやかである。
それでいいのだと思う。肥後狂句に代表されるように、熊本弁は、字で書いても、本当の心はわからない。耳から聞く言葉と思う。

十数年ぶりに熊本にかえってきたあるところのM氏。
『熊本はかわつた。熊本弁もかわつた』しみじみとこういつた。
(毎日新聞熊本支局長)

と、どうやら店員教育に問題がありそうだと。
中小企業では若い人手が不足で、店員教育のむずかしさを嘆く気持ちもわからぬではないが、熊本は殿様商法だと批判される原因を考える必要がある。
経営者対労働者、生産者対消費者、買つてくださる人があつて、経営が成り立ち、売つてくださる店があつてこそ私達の生活も豊かになる。
消費者保護行政にも一層期待するが、信頼と感謝で自分も相手も、そして社会も三方よしの世の中に早くなつてもらいたいものである。
(県消費生活モニター)

買物雑感

河田 サエ子

つい先日、ある店でプレスハムを買つた。
その日は山鹿からの帰りで夕食の時刻は過ぎていたし、冷蔵庫の中も見当がついていたので私一人の分でよかつた。
最近あまり利用していないので、出て来た店員さんは顔見知りではないが好感がもてる。私の求めで「何枚切りましようか」と聞く。百グラムと言えよかつたが「何枚」と答えた。何時もの店ではEハムを買つていたので、「そのハムのメーカーはどこ?」と尋ねると、「うちのはNハムが一番上等です」と言いながら薄板をすけ、肉切機を動かし、手ぎわよく計量器にのせて「八十円です。」
百円渡し釣銭を待つ間に目の前の秤にのせてみたら八十グラムに弱い。とするところ百グラムに当る。「一寸これは百グラムが八十円?これだけで八十円?」と秤を確認させると足元をみて、「あゝ本当ここに一枚落ちとります。お客さんが言いなはらんなら少ないままあげるところでした」と言い、丁度百グラムにして今度はポリ袋に入れながら「しっかりとサービスしときませんと…誤魔化した。」

が一番いかなでずもん」とまるで自分の誤魔化しを白状したような変なご愛想ぶり。本当に落ちていたら仕方ないが、計算に弱いのかと思いたい。
店主にとっては小才のきく利口な店員かもしれないが、消費者は馬鹿にされた感じで店はマイナスである。
物価高のおり、一円でも安い品を求めるといいが毎日の買物で、目計り、手計りに慣れ、数字に反応する訓練をしなくてはと思つた。

また、これはあるスーパーの肉売場のことだつた。同じ商標の中華焼肉に大きい方にはJASマークがあるが、やや細い方には見あたらない。一本でも多く売ろうと懸命になっている店員に「あら一寸、これは同じ会社で出来た物のようだが、一方にはJASがあるのに、こちらにはないね、どうしてだろう?」と独言を言うように話しかけたら、返事がふるっている。「あゝこれですか、これは自衛隊でも皆この焼肉を使っている印です。お客さんも一本どうですか。」お客に尋ねられ、何とか対応しなくてはとつさの思いつきか、実際そう信じていたのか?
日本農林規格の品質表示と言えはむつかしくこえるが、JASマークがあれば、消費者は買物の時の一応の目安で商品知識のいろはではあるまいか。

げなく列の先頭まで歩いて行くと、その列は一書店の入口まで続いている。なるほどきょうは一書店から新刊でもでるかと思つて、並んでいる一人に何の本が出るのかと聞いてみた。その人は「漱石」の文庫本だと答えてくれた。
思えばあのころは全く日本人は活字にうえていた時代だつた。紙もなし、本屋の書棚には全く売れ残りの趣味的な本か、新刊書と言えは戦争物にかぎられていた。私もついその列の後に並んで見たくなつた。この人達はこの一冊の文庫本のためにかんかん照りつける日ざしもたいて苦にならぬげに約一時間以上も並んで立っていた。

私はやと手に入れたざら紙の文庫本を宝物でも手にした様に持ち帰り、早速二、三回も続けて読み返した事を覚えてる。
現在の日本では新刊書の発行部数は世界のトップクラスだという。書店の店頭には、紙の香も新しい、いろんな本がうづ高く積まれている。装幀も立派だ。手に持てばずしり重みを感じる紙の質である。なかには数千円もする豪華本も多くなつた。又立派な全集ものブームである。新聞には毎日たえまなく、新刊書の広告を見る。同じ様な内容の本も全くあきずに出てくる。全く文化国家だ。私もついその宣伝につられて月には何冊かの

本がふえていく。しかしそれを全部読むでもない。目を通すのは、その何分の一にも過ぎない。毎日急がしい仕事に追われて読む根気をなくしてしまうのだ。
しかし持つておれば何時かは読むのだと思つてまた次の本を買つてしまふ。おかげで私の部屋にはまだ読みもしない新しい本がほりをかぶつてふえていく。
一冊の本を大事に読み返した昔がなつかしい。いまは単に部屋の装飾となりつゝある本の背表紙を見てたのしんでいるのは、私一人だろうか。広告や装幀につられて本を買う事はこれから少しもつしむことにしよう。

絵の展覧会を見にいくと、日本人達は、まずその作者が誰であるかをたしかめる。誰々の作品であるからその画は立派なものだと決めてしまふ。同じ作者のものでも良い作品もあればたまには駄作が出来ることもある。名前で作品を買うから美術館でも買物を買う様なことにもなつてしまふ。絵は人に見せるためのみに部屋に飾るものではなからう。その絵を見て自分の心が豊かになれば画を飾つた価値もあるのである。自分で楽しめないう画を何枚飾つても仕方がないだろう。画にしても書物にしても作者の言いたいことが少しでも自分の心にふれてこそ初めて、意義があるものと思ふ。
(画家・東光会々員)

新刊 ラッシュに想う

竹本 保

第二次大戦も終りに近づいた夏のある日、私は勤め先の東京の会社の用事で神田の本屋街を九段の方に歩いていった。神保町の四ツ角までくると、学生や勤め人風の人達が暑い夏の日ざしをうけて約百メートルも列をなしている。私は、なに